

「感じる公園ワークショップ—ユニバーサルな環境教育プログラムへの試み—」

宮嶋隆行

一般社団法人 葛西臨海・環境教育フォーラム 理事・事務局長

miyajima@kasairinkai.com

1. 葛西臨海・環境教育フォーラム

① 設立の経緯～きっかけは「愛・地球博」

私たちは葛西臨海公園・海浜公園（東京都江戸川区）を中心として環境教育・防災教育を主催する団体である。その端は2005年に開催された「2005年日本国際博覧会（愛称：愛・地球博）」に発する。メインテーマは「自然の叡智」。「国際博覧会は、地球的課題解決の場」という国際博覧会協会の決議をうけて開催された最初の万博であり、環境に配慮したハードの整備にとどまらず、ソフト面でも様々な試みがなされた。その一つが「森の自然学校・里の自然学校」と呼ばれたインタープリターが引率する参加体験型の環境教育プログラムである。これは万博史上初の試みで、185日の会期中に54万人が体験し、インタープリターという言葉や参加体験型プログラムの意味と意義を広く広めるきっかけとなった。

しかし、残念ながら万博終了後はそこで育ったインタープリターたちは全国に散ってしまったことから、万博のチーフプロデューサーをつとめた福井昌平（現・一般社団法人 葛西臨海・環境教育フォーラム代表理事）がそれを惜しみ、森の自然学校・里の自然学校の校長で日本を代表するインタープリターである川嶋直と語り、東京にも参加体験型環境教育の体験と指導者育成のための拠点を設けようとしたのがはじまりである。

② 場所の選定

場所の選定にあたって様々な有識者にヒアリングをしたところ、かなり早い段階で葛西臨海公園・葛西海浜公園が有力となった。何と云っても合法的に海にでることができる都内でも珍しい公園であること、荒川と江戸川という二つの大きな河川に挟まれ、そこから運ばれる栄養分によって干潟（西なぎさと東なぎさとよばれる2つの干潟）には多くの生物が生息し、しかもそれを狙って多くの鳥が飛来するという多様性に恵まれた場所である。しかもJRの駅前でありかつ電車で15分乗れば都心に至るという立地。大都市のど真ん中でこれだけの環境が揃った公園は世界的に見ても珍しいということが判明した。

③ 立ち上げ

2007年には福井と川嶋による声かけで海の環境教育のエキスパートである古瀬浩史（株式会社自然教育研究センター取締役・帝京科学大学教授）や海野義明（NPO法人オーシャンファミリー海洋自然体験センター代表理事）が理事として参加をして試験プログラムを開始、それらが大変に好評だったことから東京都などの後援名義を獲得してスタートした。2009年には葛西臨海公園開園20周年記念プロジェクトとして認定されてもいる。2012年には活動

の永続化を目指して一般社団法人化された。

④ 活動目的

その活動目的は「葛西臨海公園・海浜公園をインタープリターによる参加体験型環境教育の拠点とすること」と定めた。そののち、葛西臨海公園が防災公園であり広域避難所として江戸川区民 23 万人が避難することになっていることが判明、公園内にも様々な防災のための仕掛け・仕組みが配置されていることからそれらを活用した防災プログラムも 2009 年から開始。活動目的に防災を加え「葛西臨海公園・海浜公園をインタープリターによる参加体験型環境教育・防災教育の拠点とすること」とした。

⑤ プロジェクトのネーミング：「葛西臨海たんけん隊」

一般社団法人 葛西臨海・環境教育フォーラムによって実施される環境教育・防災教育プログラムを「葛西臨海たんけん隊」と名付け、対外的なコミュニケーションネームとして創設以来現在まで使用している。



(写真) 左：葛西海浜公園の人口干潟「西なぎさ」でのプログラム風景。

近隣には高層ビルが立ち並ぶ

右：西なぎさで干潟の生きものを採集している子どもたち

2. 感じる公園ワークショップ実施の経緯

① きっかけ

豊かな自然環境が再現された都市公園であると同時に防災公園であることから防災プログラムもあわせ推進しているが、2010年に江戸川区の協力を得て、区内の災害時要援護者（視覚障がい者・ろう者・老人）を対象とした防災プログラムを実施したところ、「避難先にどのような防災関連の備品が存在し、どのような仕組み・仕掛けがあるかがわかったことで、災害時に健常者に対する情報提供が可能となり大いに有益である」として好評であった。

一方で、参加者とりわけ視覚障がい者から寄せられた要望が

- ・ 避難先で必要とされる情報を持っていても、避難場所にたどり着けなくては意味がない。

災害時には障がい者は健常者の手助けがなくては何もできない。

- ・ そのためにも、災害教育は健常者と合同で実施し、私たちがどのような人たちなのか、どのような援護が必要なのかを理解してもらう機会が必要だ。というものであった。

それを受けて、まずは障がい者と健常者をペアにした防災教育プログラムを実施し、一定以上の評価をいただいた。その際に「今度は一般の環境教育も受講したい」との要望があったことからさらに環境教育プログラムを実施した。この一般的な環境教育プログラムを実施した際に、参加者はもとより、川嶋直から「日本の環境教育では障がい者対応が大変に遅れている。このようなプログラムは積極的に推進するべきだ」との後押しもあり、正式にプロジェクト化するに至った。



(写真) 左：視覚障がい者と晴眼者がペアになって参加した防災プログラム

右：葛西海浜公園前の海で防災ボートを漕ぐ

幸いにも地球環境基金（独立行政法人 環境再生保全機構）の助成を得られた（2012年～2015年）ことがその推進に大変に大きな力となっている。



(イラスト) 地球環境基金のシンボルマーク「基金ちゃん」

② スタート～第一回はダイアログインザダーク（※）との協働開発

2012年度の地球環境基金（独立行政法人環境再生保全機構）の助成金採択に伴い正式にプロジェクトとして立ち上がった。

第一回プログラムは2012年10月20日。ダイアログインザダークとの協働により実施した。ダイアログインザダークの「視覚障がい者の雇用支援」という活動主旨に賛同し、この

時は引率者が視覚障がい者、参加者はみな晴眼者であった。晴眼者はアイマスクをして公園内の植物や生きもの、石や砂などを視覚以外の感覚を駆使して楽しんだ。

(※「ダイアログインザダーク」公式 HP より：参加者は完全に光を遮断した空間の中へ、グループを組んで入り、暗闇のエキスパートであるアテンド（視覚障害者）のサポートのもと、中を探検し、様々なシーンを体験します。その過程で視覚以外の様々な感覚の可能性と心地よさに気づき、そしてコミュニケーションの大切さ、人のあたたかさを思い出します。)

③ 第2回以降～葛西臨海公園以外での開催とその拡大

第一回の参加者に葛西臨海公園の隣の夢の島熱帯植物園（東京都江東区）の園長が参加しており、このプロジェクトの意義に賛同してくださり翌2013年1月に同園での開催が実現した。

ここで判明したのは、植物園は純粋な自然とは異なり、いづどこにどのような植物が存在するかが事前にある程度明らかであることからプログラム立案が容易であり、さらに園側の理解が得られれば触ったりにおいをかいたり食べたり、場合によっては破ったりということで五感のうち視覚以外の感覚を使ったプログラムが可能になることから、「感じる公園ワークショップ」の実施場所として大いに魅力的であることが明らかになった。

これを受けて翌2013年6月には続いて夢の島で実施、その際に公益社団法人 日本植物園協会事務局長が参加、その意義に賛同してくださったことから、障がい者対応に熱心な国立科学博物館筑波実験植物園の堤千絵氏をご紹介いただき、2014年からは同園での実施が実現した。

2013年はそのほかに葛西臨海水族園や奥多摩の「やまのふるさと村」、2014年にはこれらに加えてアクアマリンふくしま（福島県）での実施がかなった。2015年にはさらに神奈川県立花と緑のふれあいセンター「花菜（かな）ガーデン」での開催が内定した。

（これまでの体験人数）

2012年度：全4日2施設 115名参加

2013年度：全14日3施設 198名参加

2014年度：全10日5施設 546名参加

④ 小会内での位置づけ

先述の通り、小会の目的は「葛西臨海公園・海浜公園を環境教育・防災教育の拠点とする」ことにあり、プログラムの愛称は「葛西臨海たんけん隊」である。その点で葛西以外での実施はその目的に相違することから理事会内で議論を行った結果、「感じる公園ワークショップ」については従来の「葛西臨海たんけん隊」とは別途の目的を持つものと位置づけ、同時に定款に法人の目的として「広く国民一般に対してさまざまな「ESD（持続可能な開発のための教育）」活動を実施する」と記すに至った。

3. 具体的なプログラム例

① 葛西臨海公園（2012年）

視覚障がい者のインタープリターが引率。参加者は目隠しをして2班にわかれ、植物観察と海の観察をそれぞれで行う。植物チームは桜の匂いを頼りに桜の木を当てたり桜茶を飲んだり、海チームは貝殻を拾ってマラカスをつくったり、海苔を焼いて食べたり。

最後に2チームが合流してそれぞれの体験を一遍の詩に編み上げることで体験を全体で共有した。



(写真) 左：においのついたメダルをかぎ合い同じにおいの人同士でグループに
右：においを頼りに桜の葉を探し当てる

② 山のふるさと村（2013年）

屋内と屋外で実施。東京郊外の豊かな環境の中に位置する公園の自然を、特に触覚に重点を置いて感じて楽しむプログラムとした。

- ・カプセルの中身にあるものの音から大きさや質感を感じとる。
- ・拍子木の材質の違いを感じとる。音の高さで並び替えたり、相撲や歌舞伎の拍子木の音を i-pad で聞いて、同じ種類の木を当てる。など。そのほかにも以下。



(写真) 左：イタチ、キツネ、ノウサギの毛を触って夏毛と冬毛の違いを理解する
右：屋外ではロープ伝いに移動し、地面や樹皮の感触を楽しむ

③ 葛西臨海水族園 (2013 年)

触覚をベースとして、生きものの形や手触りが、その生物の生活スタイルとどのように関係しているかを理解してもらう。クロマグロの特徴的な体の一部を触わって、感じたことを他の参加者に伝える。みんなで語りながらこの魚がどんな魚なのかを想像。最後までこの魚の名前は秘密。もう一つは、ヒトデやナマコなどの体の硬さ軟らかさとその変化、体の形の変化、管足による移動やその吸盤としての役割など、その生きものの特徴を触って実感。インタープリターとの会話を通じてその生きものが何なのかを想像してもらう。



(写真) 左：ナマコは触ると防衛のために体を固くする。これを実感する
右：マグロをさわって体の形とヒレなどの機能の関係を感ずる

④ 葛西臨海水族園 (2014 年) 「きみもトビハゼになろう」

絶滅危惧種のトビハゼは葛西臨海水族園が繁殖に成功していることを受けて実施。実物を観察して、葛西臨海水族園の飼育員から生態について解説を受けたのち、実際にトビハゼの格好(「トビハゼスーツ」)を着装)をして、トビハゼになりきるといふワークショップ。トビハゼのプロポーズや敵に見つからないようにする時のポーズを実際に実演。視覚障がい者、聴覚障がい者の双方に共通する感覚である「触角」を重視したプログラム作りの参考として、トビハゼの形状ならびに質感を再現した模型を作成。



(写真) 左：トビハゼスーツを着用して敵から逃げたり求愛行動を再現したり
右：トビハゼの触感に近づけたフィギュアを作り触って感ずる

⑤ 夢の島熱帯植物園 (2014年)

2チームに分かれてそれぞれ館内探索に出発。実際に木肌に触れたり、葉っぱを触ったりしながら移動。屋外にあるハーブ園にあるハーブを「くんくんボトル」につめてオリジナルのにおいをつくり、参加者同士でそれぞれのボトルをかぎ合う。

館内に戻って振り返り。立体に作られた館内地図をたどりながら感想をのべたのち、桜茶、桜餅、チョコレートを楽しんだ。触覚・嗅覚・味覚を体験。



(写真) 左：カナリーヤシを触る

右：最後に自分が発見したこと、驚いたこと、楽しかったことなどを共有

⑥ 葛西臨海公園 (2014年)

「秋の公園フェスティバル」という複数団体が参加する大きなイベントに参加。そのため、通常よりも短い時間(1時間)で多くのお客様にご体験いただく工夫を凝らしたプログラムとなった。

封筒の中に樹の葉や木の実を入れて、触覚で同じものを持っている人とペアに。

園内で松、杉、桜など匂いがする植物を採取してボトルに入れ、自分だけのオリジナルボトルを制作し、完成後お互いににおいをかぎ合う。木の幹に抱き付いたり、木の実でマラカスをつくったり。



(写真) 左：袋の中の葉や木の実を触って同じもの同士でグループに

右：においのするものを拾って「くんくんボトル」に

4. レポート

通常のプログラムと異なり「感じる公園ワークショップ」はレポートとして音声ガイドのついたものを用意している。プログラムを逐一追いかけるのではなく、そのテーマに沿って特にポイントとなる点や参加者の感動が高まった点を取り上げて肉声を中心として全行程を数個のパートに分けて採録している。また、グーグルマップを利用し、プログラムでの移動経路と再録音声を関連付けている。

本レポートはアクセシビリティチェックの専門家(伊敷政英氏)に監修のもと制作している。
(HP の URL) <http://kasairinkai.main.jp/date20140522/>



以上